

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 6月 5日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520593

研究課題名（和文） 外国語音声教育と日本人学習者による音声習得との関係の解明

研究課題名（英文） Analysis of the relationship between phonetic education of foreign languages and phonetic acquisition of Japanese learners

研究代表者

新倉 真矢子 (NIIKURA MAYAKO)

上智大学・外国語学部・教授

研究者番号：70338432

研究成果の概要（和文）：

日本における英語・ドイツ語・フランス語の音声教育の実態を把握するために、国内外で出版された3言語の外国語学習用の教科書を定量的・定性的に分析した。また国内の高校・大学生を対象に、これまで受けてきた音声教育について意識調査を行い、音声教育の実態と学習者側の意識の隔たりを明らかにした。音声習熟度判定用の読み上げテキストのコーパスを作成し、母語話者・学習者の発話をデータベース化した。

研究成果の概要（英文）：

We collected and organized the present situation of phonetic education of foreign languages in Japan by qualitatively and quantitatively analyzing the learning materials of English, German and French published in Japan and foreign countries. We issued a questionnaire to Japanese learners of the 3 languages. We surveyed the phonetic education which they have received so far and their feelings and reactions about the education, and analyzed the gaps between the actual conditions of the education and learners' feelings and reactions about it. We collected a corpus of actual speech of native speakers and Japanese learners of the 3 languages to prepare reading textbooks, and made the information of the corpus into a database.

The results are published and reflected in the research papers, reference books for pronunciation and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得理論、英語・ドイツ語・フランス語、らしさの研究

1. 研究開始当初の背景

以前の科研プロジェクトでは英語、ドイツ語、フランス語の言語「らしさ」を解明するために分節素およびアクセントグループの音響分析を行い、その言語「らしさ」の音響的特徴を明らかにした。被験者の音声習熟度の差は外国語運用能力に関係ないことが確認された。音声の習熟度には個人差があり、学習者個人がこれまで受けてきた音声教育や個人の学習スタイルに左右されることが推測された。従って日本における外国語音声教育の現状を実態調査すると同時に、学習者側からの視点で音声習得を解明することがその言語「らしさ」に近づくためのステップであり、その結果を発音教育に反映させることはコミュニケーション上重要なその言語「らしさ」を習得させる方法や手段の解明につながると思われた。

2. 研究の目的

これまでの科研プロジェクトで得られた音響分析結果をもとに(1)学習者の音声習熟レベルを確定し、(2)各レベルの学習者がこれまで受けてきた音声教育を調査・分析するとともに学ぶ側の視点から音声教育の効果的な方法を探る。(3)大学での外国語教育の中で重要な言語である英語、ドイツ語、フランス語の3言語を比較しながら包括的な外国語音声教育へとつなげる。

3. 研究の方法

(1)学生の音声習熟度を英語、ドイツ語、フランス語の教育関係従事者、滞日歴6カ月未満の母語話者5人ずつがオンラインによる4段階の判定を行い、習熟度と音響データとの関連を検証した。判定には分節素(母音、子音)と超分節素(リズム、イントネーションアクセント)の8項目が含まれ、各文型(平叙文2・疑問文2・命令文1)を用いて評価を行った。対象者は各言語の音響データにより判断された初級学習者・中級学習者3人ずつの合計30文の録音音声を使用した。

(2)国内外で2009年・2010年に出版・改訂され、日本での使用頻度の高いと推定される3言語の外国語学習用の教科書(英語8冊、ドイツ語30冊、フランス語34冊)の中で音声教育に関する箇所について12項目(分節素、超分節素、対立、発音例の有無、解説の有無、練習問題の有無など)の計量化を行った。

(3)教材分析と並行して各言語の学習者(国内の高学生・大学生対象;英語2486人、ドイツ語1172人、フランス語1050人)に音声教育に関するアンケート調査(授業内容、授業環境、意識調査に関する16項目)を実施し、これまで受けてきた音声教育の実態を調査する

とともに教材分析の結果との異同を分析した。

(4)学習者の音声習熟度を判定するために言語別、6種類のテキスト(読み上げテキスト2本、中級・初級用会話テキスト4本)、インタビュー用のテーマリストを作成した。各テキストには分節素・超分節素の習熟度を判定するために各言語の音素目録が反映され、各文型(平叙文、疑問文、命令文、従属文など)が埋め込まれている。

4. 研究成果

音声教育を行う場合には、対象言語「らしさ」(likeness)を身につけることがコミュニケーション上重要となる。これまでの科研プロジェクトではその言語「らしさ」について音響的側面から分析を行ったが、今回のプロジェクトではこの基礎的研究で得られた結果を音声教育に応用した。主な結果は以下の通りである。

(1)教育関係従事者および滞日歴6カ月未満の母語話者5人ずつが、音響データにより判断した初級学習者・中級学習者レベルの各3人に音声習熟度判定を行った結果、フランス語の教育関係従事者及び一般母語話者の判定では初級学習者と中級学習者の間に顕著な差がみられ、ドイツ語と英語では教育関係従事者による判定でかなりの差が認められたことから、音響データと音声習熟度との関連性が分節素と超分節素レベルで確かめられたといえる。

(2)各言語の教科書分析と学習者の意識調査の結果から次の点が明らかになった:①総ページ数に占める音声教育の割合は、3言語とも平均3%前後と極めて低い数値であり、学習レベルが上がるほどその割合は低下する。②3言語とも教科書の超分節素の割合(平均3%)が低く、学習者の意識調査で得られた結果と一致する。③日本で出版されたドイツ語とフランス語の教科書は、「つづり字の読み方」の割合が高いが、ドイツ語やフランス語の教科書では「韻律」と「対立」に多くのページが割かれている。④中学校の英語教科書ではコミュニケーションを目的とする韻律に占める割合が50%以上だが、高校では30%に下がり、分節素(子音、対立など)に教育の重点が移動する。

⑤「発音をもっと教えてもらいたい」とする学生は約半数を占め、「発音の上達」に関心のある学生は90%以上であることは学習者の意識と教科書の音声教育実態が乖離しているといえよう。⑥情報伝達に重要な言語リズムの扱いは、教科書、授業内容ともに低く、音声教育の分野での補完が必要である。

(3)学習者の音声習熟度を判定するためのタスクを開発し、各言語の母語話者5名および日

本人学習者150名が産出した音声を収録し、データベース化して言語別・(非)母語話者別・習熟度別(中級者・初級者)のコーパスを構築した。

(4)音声習熟度の高い学生は、学習ストラテジーの中でも自己モニターストラテジーと計画ストラテジーを使い、発音の重要性を認識し、モチベーションが高いという結果が得られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① Niikura, Mayako, Aussprachelernstrategien und -lernprozesse bei Deutschlernenden – ein computer-gestütztes Aussprache-Lernprogramm, Fremdsprache Deutsch Nr.46, Hueber Verlag, 2012, pp.27-33. 査読有
- ② 井上美穂「破裂音[p][t][k][b][d][g]における閉鎖部分の長さの測定」、慶応義塾外国語教育研究、第8号、2012年、pp.1-22。査読有
- ③ 井上美穂「日仏両国で出版された教科書における音声教育部分の比較」、Etudes Didactiques du Français Langue Etrangère au Japon (EDFJ)、第21号、2012年、pp.84-94。査読なし
- ④ Niikura, Mayako, Tsutomu Sugawara, Ursula Hirschfeld: A Problem of Prosodic Transfer in the Perception of German Learners of Japanese and Japanese Learners of German. Proceedings of the 17th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS XVII), 2011, pp.1490-1493. 査読有
- ⑤ Niikura, Mayako & Masaki, Akiko. Lernstrategien beim Aussprachelernen von japanischen Lernenden. IDV – Magazin Nr.84, 2011, pp. 629-638. 査読有

[学会発表] (計5件)

- ① 新倉真矢子、『音声学習ストラテジー』を用いた音声習得の可能性、シンポジウムⅢ「ドイツ語音声教育の現状と可能性」、日本独文学会第66回総会春季研究発表会、2012年5月19日、上智大学。選抜有
- ② Niikura, Mayako & Sugawara, Tsutomu, A Problem of Prosodic Transfer in the Perception of German Learners of Japanese and Japanese Learners of German. ICPhS XVII, Hong

Kong. 2011年8月19日。選抜あり

- ③ Inoue, Miho, L'enseignement de la phonétique de la langue française, dans les établissements scolaires au Japon. 日本フランス語教育学会、国際大会2010、「東アジアと世界におけるフランス語教育」。2010年11月7日、京都大学。選抜あり
- ④ 新倉真矢子・菅原勉、日独学習者の疑問文イントネーションにおける心的影響。日本独文学会2010年度秋季研究発表会。2010年10月10日、千葉大学。選抜あり
- ⑤ 井上美穂、小島慶一、CALLを利用したフランス語の発音指導：長さや強さに関して、e-Learning教育学会、2010年3月13日、九州大学・伊都キャンパス。選抜あり

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新倉 真矢子 (NIIKURA MAYAKO)
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：70338432

(2) 研究分担者

小島 慶一 (KOJIMA KEIICHI)
聖徳大学・文学部・教授
研究者番号：90234757

(3) 連携研究者

正木 晶子 (MASAKI AKIKO)
上智大学・一般外国語教育センター・講師
研究者番号：10407372

協力者

- ・菅原 勉 (SUGAWARA TSUTOMU)
上智大学・外国語学部・名誉教授
- ・井上 美穂 (INOUE MIHO)
上智大学・一般外国語センター・非常勤講師
- ・遠山 道子 (TOYAMA MICHIKO)
上智大学・外国語学研究科言語学専攻・非常勤講師
- ・大井川 朋彦 (OOIGAWA TOMOHIKO)
上智大学・外国語学研究科・博士課程在学
- ・高橋 絹子 (TAKAHASHI KINUKO)

上智大学・外国語学研究科・博士課程在学

- ・粕谷 麻里乃 (KASUYA MARINO)

上智大学・外国語学研究科・博士課程在学

- ・吉田 麻里子 (YOSHIDA MARIKO)

上智大学・外国語学研究科・博士課程在学